

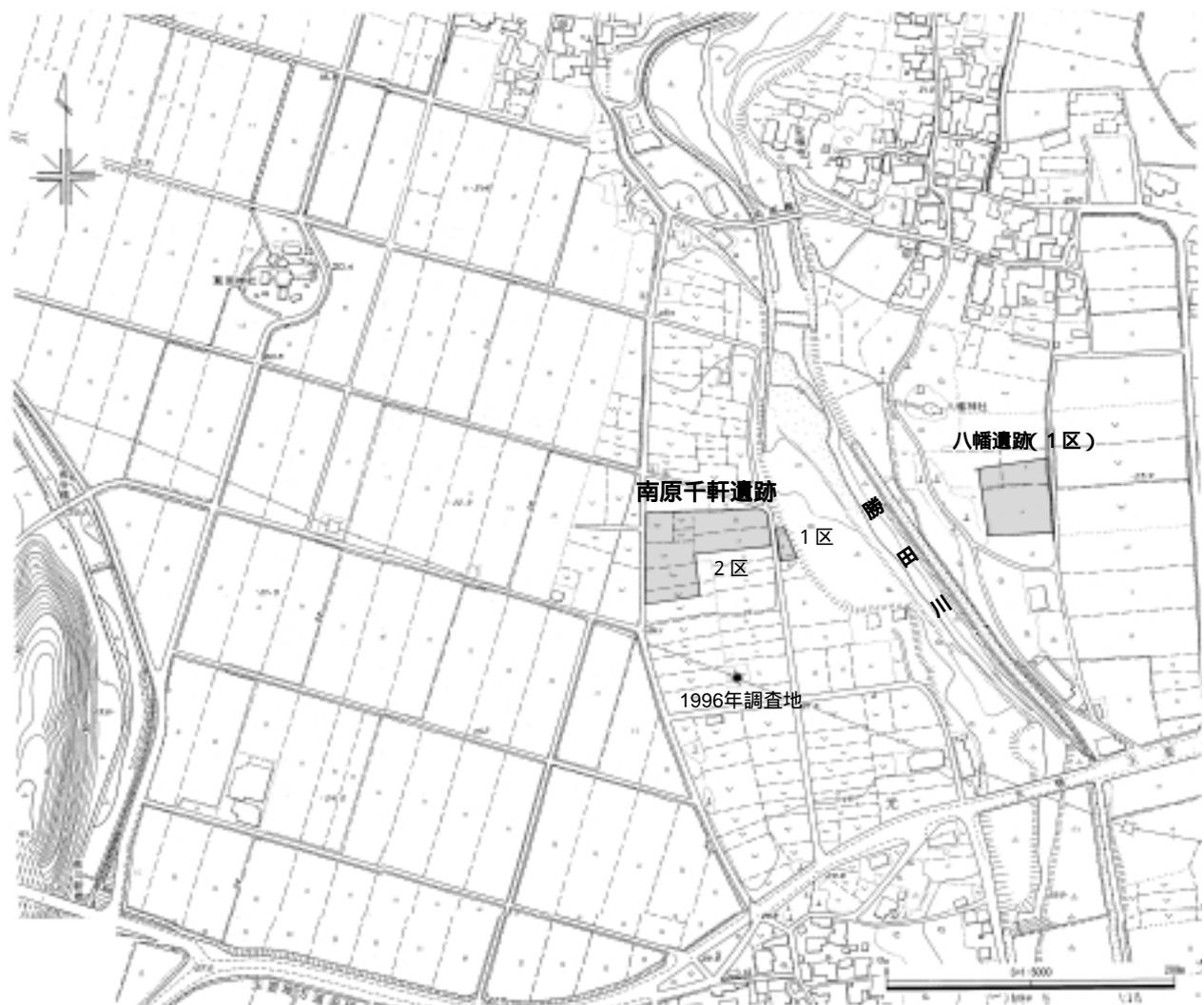
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号東伯中山道路の改築に伴い、東伯郡^{ことうら}琴浦町^{みつ}光地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である南原千軒遺跡^{なんばらせんげん}の記録保存を目的としたものである。当該地は旧東伯郡赤碓町に所在するが、平成16(2004)年9月1日に東隣の東伯町と合併し、琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和および将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧赤碓町地内では別所中峯遺跡^{べっしょなかがみね}、松谷中峰遺跡^{まつたになかみね}、化粧川遺跡^{けしょうがわ}、福留遺跡^{ふくどめ}、八幡遺跡^{やわた}、南原千軒遺跡^{なんばらせんげん}、湯坂遺跡^{ゆざか}、長谷城跡^{ながたに}、笹津乳母ヶ谷第2遺跡^{のつうぼがたに}、中山町域と跨る梅田萱峯遺跡^{うめだかやうね}などの多数の遺跡があり、建設に先立ち計画地内の遺跡および遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、赤碓町および中山町教育委員会が平成11(1999)年度から15(2003)年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行った。当該地の試掘調査は、平成15年度に行われた^{註1)}。



第1図 調査地位置図

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に当財団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

なお、平成8（1996）年度には、今回調査地の約60m南の地点において、送電線鉄塔化工事に伴う試掘調査が赤碕町教育委員会によって行われたが、その際の調査では遺構、遺物ともに確認されなかった^{註2}）。

註1）小泉傑・石賀太編 2004 『赤碕町内遺跡発掘調査報告書』赤碕町埋蔵文化財調査報告書第15集、赤碕町教育委員会

註2）大谷浩史編 1997 『赤碕町内遺跡発掘調査報告書』赤碕町文化財調査報告書第10集、赤碕町教育委員会

第2節 調査の方法と経過

（1）調査区の名称と調査方法

南原千軒遺跡の調査区は東西に長い長方形状であり、その東端寄りを農道が南北に通っている。この農道の東側を1区、西側を2区と呼称した（第1図）。2区南側には着手当初から未用買地があり、期間中に買収可能とのことであったが、現地調査終了までに買収が困難となったことから、国土交通省と協議のうえ、今年度の調査対象からは除外した。その結果、2区は実質上L字形を呈することとなった。

また、試掘結果により遺構面は2面とされていたが、調査区際でのトレンチ調査および試掘トレンチを再掘削して検討した結果、1面目から2面目とされた面までの層位には遺物は包含されておらず、また2面目において土坑と報告されていたものも自然地形の誤認であったことが判明したため、当初の計画を変更して全面1面の調査を行うこととなった。

表土の除去には重機を用い、それ以外の包含層、攪乱土および遺構の掘り下げは人力で行った。排土は2区西端に仮置きし、数回にわたって場外に搬出した。

表土剥ぎ終了後、公共座標第 系に基づく10m間隔の基準杭を設定した。これらの杭には、南北軸には算用数字を東から、東西軸にはアルファベットを北から付し、「A1杭」のように呼称した。また、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとってグリッド名とした。

検出した遺構・遺物の記録には光波トランシットを用いた。出土遺物のうち、時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構もしくはグリッド毎に一括して取り上げた。遺構や遺物出土状況の写真撮影には35mm判と6×7判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラを併用した。遺物の写真撮影には4×5判と6×7判とを用いた。

（2）調査の経過

南原千軒遺跡では、平成16（2004）年3月4日に調査前航空写真撮影の委託契約を結び、調査を開始した。4月12日から15日にかけて重機による表土除去を行い、4月19日に委託業者による基準点測量を行った。4月20日より作業員を稼動して遺構検出作業を開始した。

2区では、表土下に厚さ約20cmの包含層が堆積していた他、近現代の畝耕作による攪乱も各所で認

められた。これらの包含層および攪乱土からは大量の遺物が出土したことから、掘り下げには時間と労力を要した。5月中旬頃までには遺構面の検出をほぼ終え、遺構の調査に取りかかった。なお、1区では表土下で検出したのは黄褐色の砂質土層であり、2区の遺構面である黒褐色土の堆積は認められなかった。また、表土除去から黄褐色砂質土層検出に至る過程において遺物がまったく出たしなかった。この黄褐色砂質土は、2区でのトレンチ調査の所見によれば遺構面（黒褐色土上面）より下位の層序であることから、1区においては遺構面（黒褐色土上面）が既に削平され失われたものと判断した。

調査を進めていくうえで、SK2からの和鏡の出土、SB1からの銭貨の出土、縄文時代の住居跡SI5の検出など、重要な成果が次々と明らかになった。これらの遺構の多くは、埋土が地山と非常に似通っていたため、その検出や掘り下げにあたっては、サブトレンチを多く設定して慎重を期した。6月中旬になって、2区南端付近にSD1・SD6・SD7など大規模な溝が重複して存在することが明らかになった。これらの溝は土量や出土遺物も多く、これ以降は常時作業員の半数近くが溝の掘り下げに取り組んだ。6月下旬から7月にかけては記録的な少雨となり、調査地内は白く硬く乾燥して遺構埋土の識別はますます困難となった。そのため稼働日数の多さと作業効率とは必ずしも比例しなかった。

SD6・SD7などがほぼ完掘に近づき、調査成果がまとまりをみせた8月7日に現地説明会を開催した。好天にも恵まれ、町の内外から約80名の方々の参加があった。8月10日に委託業者による調査区の航空写真撮影を行った。この段階では、現地調査の終了を8月中旬から下旬に予定していたものの、終了間近となっても新たな遺構の発見が相次いだため調査期間を延長し、9月16日に作業員の稼働を終了した。その後、調査担当者による補足調査を行い、10月28日に現地での調査を全て終了した。

発掘調査報告書の作成に伴う遺物の整理作業は埋蔵文化財センターで、図面類の整理作業は東伯調査事務所で行った。整理作業および報告書の作成は現地調査と並行して進め、平成16年度末をもって終了した。



写真1 2区表土除去作業風景



写真2 調査風景

第3節 調査体制

調査は、下記の体制で実施した。

調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 登

埋蔵文化財センター

所長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 竹内 茂

次長（専門） 加藤 隆昭

調査課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶務課

課長（兼次長） 竹内 茂

主幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

調査担当 東伯調査事務所

所長 佐治 孝弑

班長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山 浩和（福留遺跡・湯坂遺跡担当）

君嶋 俊行（南原千軒遺跡担当）

高尾 浩司、小口英一郎（中道東山西山遺跡担当）

野口 良也、濱本 利幸（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

玉木 秀幸、浅田 康行（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

恩田 智則、小谷 郁夫（化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当）

調査員 西川 雄大（南原千軒遺跡担当）

岩井 美枝、福井 流星（中道東山西山遺跡担当）

前島 ちか（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

阪上志緒里（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

調査協力 琴浦町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

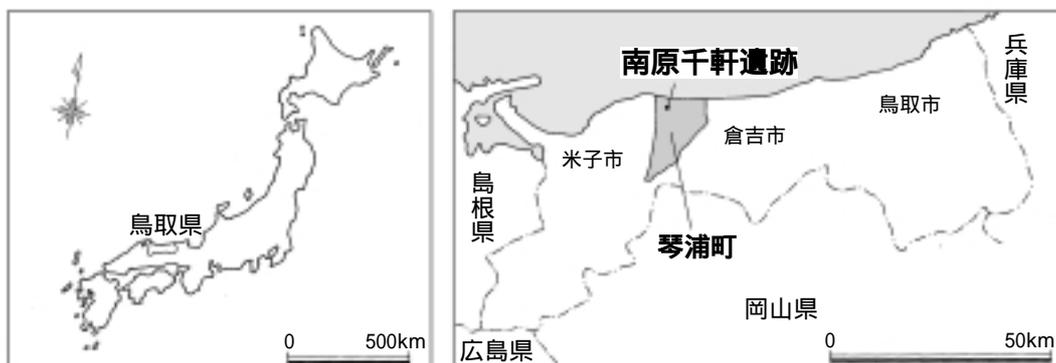
南原千軒遺跡が所在する琴浦町は、平成16年9月1日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した、新しい町である。この町名は、かつてこの地域の海岸一帯が「琴ノ浦」と呼ばれていたことに由来する。当町は鳥取県中部、東伯郡の西側を占める位置にあり、町域は、大山連峰の烏ヶ山（1381m）から船上山（615m）を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測り、人口は約20,500人（平成16年末）である。

本町の地勢は、大山（1729m）山系から手指状に派生する急峻な丘陵地、加勢蛇川・洗川および勝田川・黒川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で細かな起伏が認められる。丘陵地は、火山灰土の堆積した溶岩台地状地形が海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計8本の川が日本海に注いでいる。

当町の北側は、国道9号線沿線で弱電、酒造、食品製造などの商工業群が形成されている。特に、八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流および戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道の清水駅、中世以降は八橋城が築かれた場所でもある。赤碕港は、主に沿岸漁業が盛んである。町中部域は、県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、丘陵上では昭和20年代から二十世紀梨栽培が行われ、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県湯梨浜町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立つようになった。また、平野部においては水稲とともにかつては国内でも有数の生産地であった芝栽培の他、プロイラー、乳牛、和牛などの畜産も盛んに行われている。町域南側は、国立公園の一部の大山滝、伯耆大シイ、船上山などが知られ、風光明媚な自然・景勝地を求めて観光客が訪れる地域となっている。

町内の遺跡は、加勢蛇川下流域右岸の低丘陵地と、加勢蛇・洗川左岸の丘陵台地とその山裾付近、勝田川流域および黒川左岸丘陵上に集まっている。加勢蛇・洗川両河川に挟まれた平野部には、律令時代の条里制の名残が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りがよいとは言えない。

南原千軒遺跡は旧赤碕町域に位置し、JR赤碕駅の南西約1.5km、標高約25mの沖積平野に立地する。調査地周辺は、遺跡のすぐ東側を流れる勝田川によって形成された扇状地であり、旧赤碕町域では最も広く発達した稲作・畑作地帯となっている。（牧本）



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代 鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていない。当町でも松ヶ丘、槻下で尖頭器が数点、三林遺跡（6）でサイドスクレーパー、笠見第3遺跡（7）で舟形細石刃石核が見ついているが、層位的にはいずれも確認されていない。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では大栄町西高尾谷奥遺跡（41）で押型文土器とともに住居跡の可能性のある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（68）、森藤第1・2遺跡（39）、上伊勢第1遺跡（2）などで土器片が出土している。中期では、井岡地中ソネ遺跡（5）、井岡地頭遺跡（4）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第2遺跡では中央に石囲炉をもつ竪穴住居跡が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。また、勝田川左岸の南原千軒遺跡（19）では、中津式併行期の竪穴住居跡の他、今朝平タイプに類似した土偶が出土している。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡（17）、化粧川遺跡（16）、笠見第3遺跡、中尾第1遺跡（1）など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代 米子市目久美遺跡で前期の水田が確認されているが、県中部では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期前葉では、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡（3）、井岡地頭遺跡などで土器が出土し、前期後葉では、中尾第1遺跡で密集した配石墓・土壙墓、三保第1遺跡でも集石遺構が見ついている。中期では、中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡で小規模な集落が営まれている他、墓ノ上遺跡（67）、別所女夫岩峯遺跡（63）で木棺墓が検出されている。その他、南原千軒遺跡では、玉作関連遺物が出土している。

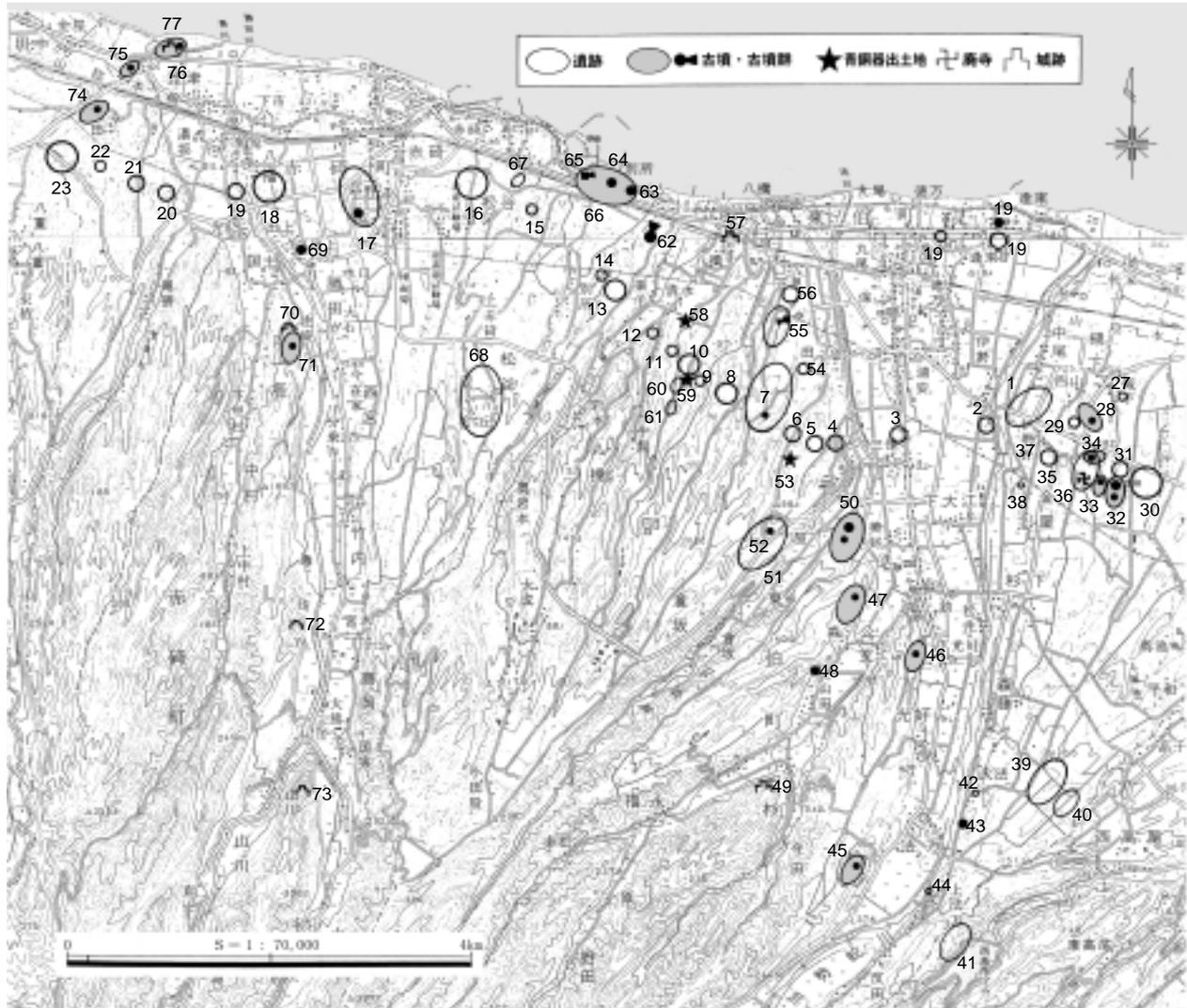
中期後葉から古墳時代初頭にかけて、特に後期後葉をピークに丘陵上で集落遺跡が大幅に増加する。森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡（30）、大峰遺跡（40）、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡（51）、笠見第3遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡（8）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡などがある。これらの遺跡の中には、集落内に玉作工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに鉄製工具等が出土している。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡は、後期の工房跡で碧玉・緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片が多数出土しており、製作に当っては鉄器が使用されている。

湯坂遺跡（20）では、小型の墳丘墓が築造されている他、井岡地中ソネ遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の溝で区画された土壙墓群が見ついている。

また、弥生時代の祭祀に特徴的な銅鐸が、県中部では6遺跡で計7口見ついている。当該地域では、八橋南方丘陵上（58）で銅鐸（扁平鈕式）が1口見ついている。また、田越南方丘陵上（53）では、出土状況は明らかではないが、箱式石棺の下から中細形銅剣が4口、久蔵峰（59）で銅矛が1口出土している。八橋地区を中心とする地域は、銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土しており、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態があったものとして興味深い。

古墳時代 当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所1号墳（笠取塚古墳）（65）は、撥型に開く前方部等の特徴から前期に遡る可能性がある。中期から後期になって前方後円墳が築造され、八橋狐塚古墳（62）、笠見1号墳（55）、竜ヶ崎3号墳（50）がある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになり、大高野古墳群（32）、塚本



1.中尾第1遺跡、2.上伊勢第1遺跡、3.三保第1遺跡、4.井図地頭遺跡、5.井図地中ソネ遺跡、6.三林遺跡、7.笠見第3遺跡、8.中道東山西山遺跡、9.久蔵谷遺跡、10.久蔵峰北遺跡、11.蟻谷遺跡、12.岩本遺跡、13.八橋第8・9遺跡、14.別所中峯遺跡、15.松谷中峰遺跡、16.化粧川遺跡、17.福留遺跡、18.八幡遺跡、19.南原千軒遺跡、20.湯坂遺跡、21.筥津乳母ヶ谷第2遺跡、22.梅田所在遺跡、23.梅田宮峯遺跡、24.逢束双子塚古墳、25.逢束遺跡、26.逢束第2遺跡、27.槻下豪族居館跡、28.槻下古墳群、29.下斎尾2号遺跡、30.水溜り・駕籠据場遺跡、31.大高野遺跡、32.大高野古墳群、33.塚本古墳群、34.斎尾古墳群、35.下斎尾1号遺跡、36.斎尾廃寺、37.伊勢野遺跡、38.金屋経塚、39.森藤第1・2遺跡、40.大峰遺跡、41.西高尾谷奥遺跡、42.大法古瓦出土地、43.大法3号墳、44.上法万経塚、45.杉地古墳群、46.下光好古墳群、47.公文古墳群、48.山田1号墳、49.妙見山城跡、50.竜ヶ崎古墳群、51.三保遺跡、52.三保6号墳、53.田越銅剣出土地、54.田越第4遺跡、55.笠見第2遺跡・笠見1号墳、56.笠見第1遺跡、57.八橋城跡、58.八橋銅鐸出土地、59.久蔵峰銅矛出土地、60.八橋第2遺跡、61.八橋第4遺跡、62.八橋狐塚古墳、63.別所女男岩峯遺跡、64.別所2号墳、65.別所1号墳（笠取塚古墳）、66.別所古墳群、67.墓ノ上遺跡、68.松ヶ丘遺跡、69.出上岩屋古墳、70.太一垣城跡、71.太一垣古墳群、72.大仏山城跡、73.山川城跡、74.梅田古墳群、75.坂ノ上古墳群、76.筥津古墳群、77.筥津城跡

第3図 琴浦町の主要遺跡分布図

古墳群（33）斎尾古墳群（34）公文古墳群（47）竜ヶ崎古墳群、別所古墳群（66）筥津古墳群（76）坂ノ上古墳群（75）梅田古墳群（74）などがある。また、後期以降、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法3号墳（43）や三保6号墳（52）、大栄町上種東3号墳、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群（28）塚本古墳群、大高野古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。大高野3号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下5号墳（代々1号墳）では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田1号墳（48）や出上岩屋古墳（69）は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、丘陵上に営まれる三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、八橋第8・9遺跡(13)、松谷中峰遺跡(15)、別所中峯遺跡(14)などの他、低地部でも小規模ながら中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡、逢東第2遺跡(26)等がある。

古代 現在県内では22カ所の古代寺院が見つまっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残し、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている齋尾廃寺(36)は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦の他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものが出土し、山陰・山陽では数少ない瓦当文様をもち、畿内と結びつきの深い有力豪族が齋尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。大高野遺跡(31)では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉(郷倉)と考えられ、郡衙推定地もその周辺に比定されている。その周辺の伊勢野遺跡(37)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つまっている他、大法に古瓦出土地(42)がある。加勢蛇川下流右岸域は、伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと推察される。その他、旧籠津郷に当る八幡遺跡(18)では、掘立柱建物、赤色塗彩土師器が多数出土している。

平安時代では、上伊勢第1遺跡で、規格性のある大規模な畠跡が見つまっている他、丘陵上の中道東山西山遺跡では小規模な鍛冶施設が検出されており、当時の農耕、集落内鉄器生産の様相を窺うことができる。笠見第3遺跡、三林遺跡では、専用器を用いた火葬墓が検出されている他、当該期末になると末法思想が広まり、金屋(38)と上法万(44)でも経塚が作られ、金屋では銅経筒が出土している。

中世 南原千軒遺跡では、大規模な溝内から大量の鉄滓が出土している他、整然と並ぶ掘立柱建物や和鏡を副葬した墓壙が検出されている。井岡地頭遺跡では、平安時代末頃の「コ」字状の方形区画溝があり、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。また、『伯耆民談記』に「岩野弾正坊居す」と記された、槻下館跡(27)がある。台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ2mの土塁が築かれている。その他、町域西側海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の「赤碕塔」が、6基確認されている。

船上山には、鎌倉時代末の戦乱期に、後醍醐天皇が隠岐島から逃れる際に立て籠もった国史跡行宮跡がある。その他中世城館が各地に見られ、南北朝時代には、行松氏によって築造されのちに尼子・毛利氏の支配下となり、伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡がある。また大杉には南条氏の出城である妙見山城跡(49)、籠津には、土塁と堀を持つ籠津城跡(楨城)(77)がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城跡(70)、大仏山城跡(72)、山川城跡(73)などがあり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城攻撃に関与した城と考えられている。

近世 江戸時代前期、寛永14(1637)年の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」の文字がみられることから、逢東はこの時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれ、現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。(牧本)

【参考文献】

赤碕町編 1974『赤碕町誌』/東伯町編 1968『東伯町誌』/鳥取県教育委員会 2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会/鳥取県埋蔵文化財センター編 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団/内藤正中・真田廣幸・日置桑左エ門 1997『県史31 鳥取県の歴史』山川出版社/坂詰秀一編 2003『仏教考古学辞典』雄山閣



第4図 調査区全体図